

三無主義といわれたころ

山城22回 大河内 令子

団塊の世代のすぐ後が私の生まれた年代です。当時は、クラス約五〇人から五三人で九クラスありました。普通科と商業科が、一つのホームルームに同居していて、授業は、講座と呼ばれる別編成で行われていました。

私が、めぐまれていたのかも知れませんが、在籍した三年間、ホームルームは、いつも和気あいあいとしており、個性あふれていて、もちろん小競り合いや反目や、「しらけムード」はあったものの、今思えば、授業とは別の、何となく平和な空間だったように思います。

噴水のあった中庭で、フォークコンサートをしたり、山城祭の準備に学校へ泊まり込んだり、仲間たちとのかかわりが、楽しく、ほんわかした物であった反面、ちやうど学生運動のピークで、あちこちの大学で封鎖騒ぎがおこり、この先自分は、どうなっていくのだろうと、漠然とした不安を感じていました。

当時、制服はなく、自由に、自主的にという、校風がありました。ただそれは、ともすれば、無気力、無責任、無関心という、その頃よく言われた、いわゆる三無主義と表裏一体で、そうならないようにという呼び掛けが、それも、学校側からではなく、生徒自身の中から、わき上がっていたように思います。

「二度とない青春を謳歌しよう!」という、青春ドラマの台詞に頷いて、友人と熱く語りあってみたかと思えば、反戦フォークを歌っては、日本の戦争は知らないけれど、ベトナム戦争の時代にいる私たちが、何かを変えなければならないんだ、と、息巻いてみたり、「私なんかが、なんぼがんばったって、何にもならへんやん。しゃーないやん。」という、無常感と無力感の中で、深夜放送をききながら、膝を抱えていたり、毎日、自分の立っている場所が、違っていました。

あれほど雑雑とものを考え、たくさんの人と出逢い、泣いたり笑ったり、矛盾だらけの自分をもてあました時期はなかったなあ、と、本当に懐かしく、いとおしく思い出します。

今、山城高校は、見違えるように新しく、設備の整った学校になりました。私たちの過ごした時代の、思い出の痕跡はもう残っていません。でも、「私、あの山城高校の出身なんです!」と、胸を張って言えるような学校であり続けて欲しいと、心から願っています。